

ていた。

さらにこの時間帯の風向に着目してみる。陸上の気象官署での風向はなめらかに北風に変化している。これに対し橋の中での風向は、第4図に代表されるようにこの時間帯だけ風向がめまぐるしく乱れている。これは、橋の外の北風は依然として強いものの、橋の中だけがかなりの乱流状態になっていたために風速としては弱く記録されたことを意味している。

以上のことは、第2図のような鉄骨枠組の構造をしている橋が南北に架かっているため、橋の中では橋の外に比べて南北方向の風は吹きにくいことを示している。

ところで、このように南北方向の風は正しく測定できないから、もし今回の台風で最も強い風が北の風向で生じたならばこの解析にとって本質的なことになる。しかし前節に示したように、今回は陸上・橋上ともに東寄りの風向で強風が生じているので、東西方向の風についてはこの様な鉄骨枠組の橋の中でも比較的正しく測定でき

たと考えてよいだろう。

## 5. 結 論

1989年の台風第17号による瀬戸大橋上の風は、最大風速 27.5 m/s を記録した。これは陸上の気象官署で観測された風の約2倍である。なお、最大瞬間風速は 43.0 m/s であった。また、瀬戸大橋は南北に架かっており、南北成分の風は吹きにくい、東西成分の風は比較的正しく測定できることが分った。なお、海陸風の特徴を知るうえでも有効なデータが得られるので、今後はデータの蓄積によって海陸風のさらに詳細な解析が期待できる。

## 謝 辞

本稿で解析した風速計の記録は、JR 四国運輸部保安課の御好意によった。厚く謝意を表する。

## 月例会「長期予報と大気大循環」のお知らせ

話 題：力学的長期予報の現状と将来

日 時：1990年9月21日（金） 13:00～17:20

会 場：気象庁第一会議室（5階）

セッション 1（座長：重久 陽亮）

1. 13:10～13:40 冬期における成層圏循環の対流圏に及ぼす効果

……\*小寺邦彦・千葉 長・柴田清孝（気象研究所）

2. 13:40～14:10 予報誤差の変動と準定常状態

……\*向川 均（気象大学校）・木本昌秀（UCLA；気象庁数値予報課）・余田成男（京都大学理学部）

3. 14:10～14:40 30～60日振動と延長予報の可能性

……………露木 義（気象研究所）

14:40～15:00 休憩

セッション 2（座長：工藤 達也）

4. 15:00～15:30 気象庁全球モデルによる冬季1か月予報実験—時間ラグ平均法（LAF法）を中心とし

て—

……\*山田真吾・前田修平・工藤達也（気象庁長期予報課）

5. 15:30～16:00 気象庁全球モデルによる1年積分の解析

……\*岩崎俊樹ほか 数値予報課全球モデル開発グループ（気象庁数値予報課）

6. 16:00～16:30 SST実験により何がわかったか—大気海洋結合モデルによる長期予報の展望

……………杉 正人（気象研究所）

16:30～17:20 総合討論

（\*講演発表者）

月例会終了後 同会場で懇親会を予定しています。

問い合わせ先：〒100 東京都千代田区大手町 1-3-4

気象庁予報部長期予報課 林 久美

電話番号 03-212-8341（内線 330）